の理解と、他方に於いてはそれらの外來畫風の影響拘束から漸次解放されて自由なる國民的時代的感情の表現を達成し行く過程の探究が常にその中心的なる課題となつてゐる。而してその際働いた重要なるモメントの一として著者の注意するところのものに我國の畫家が日夕接したところの四圍の自然がある、著者はそのことをたゞに繪卷物に現出せる山水に就いて論證するのみならず、また近世の南宋畫の發展の上にもみようとして蕪村を通じて廣重にまで言及する、蓋し著者の最も得意としたところではなからうか。とまれ少壯胡夷の名によつて夙に詩人として知られた著者の好尚は繪を賞するに於いても常にその上に漂ふ主觀的なる詩趣とそを通じてその奥に存する畫家の内的生活とに注がれてゐたものと思はれる。而してその同一なる態度もその最も早き時代になる蕪村論と最後の推古期の繪畫とを比するときその間に著しい洗練の跡が認められるにつけてもなほ歳五十に滿たずして逝いた著者が今更に惜まれると共に、せめては續いて公刊を約された東洋美術史に關する諸論文と、なほ望むらくは晩年最も力を注がれたと聞く大和繪史論の講案の如きものゝ速に世に出でんことを願うて已まない。（菊判五五二頁、定價六・〇〇京都星野書店發行）〔柴田〕

古社寺の研究　　魚澄惣五郎著

京都を中心とする史學界の活動の著しき特徴の一は史跡調査であらう。これには凡そ二の原因が考へられる。近畿が古き歴史の地たる結果顯著たる史跡に富むといふいはゞ歴史的理由がその一であり他は現代人が近畿について關心するところは大阪を中心とする旺盛なる經濟活動を除いてはまづこれらの史跡に觸れんとするにありとするいはゞ現代的要求がこれである。これらの二の事情は相合してその史學界を刹戟しこゝに史跡調査の盛行を見るに至らしめたのであらう。

著者はこの方面に於ける先輩として既に多くの論攷を發表して居られるが今回これらを集成し古社寺の研究と題して世にとはれたのは慶賀に堪へない。内に含む諸篇は嘗て一度人々の目に觸れたものであるがかく一書を成

すに於て新に著者の學問全體につき考へしめるものがある。先づ著者は文獻的方法特に古文書の驅使によつてその研究に向はれてゐる。これ古社寺が多くこの種の史料に富むことを一因とするものであるがそこに又著者の得意とするところがあるのであらう。その内容は「室町時代の寺院と民間信仰」「吉野金峯山寺と山伏」「氏神と祖神との關係」「豐國社破却の顚末」等は喩信仰史的範圍に屬するものであるがその他は寺院を中心とする社會經濟史の範疇に屬するものが多い。卽「王朝時代の寺院制度と國分寺の興廢」「中世の寺院所領」「東大寺の開墾事業及び平城京東西市」の如きものがそれである。その他「攝津河内源氏の本貫としての多田院と通法寺」「赤松氏の菩提寺と播磨千種川溪谷」「中世淀川河口の發達と大覺寺文書の研究」の如き歷史地理的色形に富むものもある。これら諸篇を通じて著るゝものはその社會史的經濟史的態度でありそこに著者と現代とが問題とするところを示してゐる。著者はこれらの諸篇の取扱ひに多くの獨創と親切なる解說とを與へこれをつゝむに流麗なる筆致を以てしてゐる。我々はこゝに著者十餘年の努力を想ひまた啓發の思を感ずることが多い。正篇十四章の外に二十章の附錄があり正篇と共に見るべき文字である。（菊版五七〇頁、圖版三〇・價五・〇〇圓、京都星野書店發行）〔肥後〕

●能樂古今記

野々村戒三著

音樂、演劇の如く時間的に經過し去る藝術の史的研究はこれを直接その當體よりすることは不可能であり何等かの間接的史料を通じて之を復原する外はない。かゝる史料の主たるものは勿論文獻でこゝに藝術史の文獻的研究が必要となつて來るのである。しかも通常これらの文獻は各藝術家の傳記乃至その藝術の傳承に係るものが多い。これは文獻による藝術史研究の自ら受くべき制約をなすと共に又その最も效果ある方面をなすのである。

今、著者は我が古典藝術中最も特異なるものの一である能樂について古今に亘る研究をなさんとせるものであるがその方法は要するに上述の文獻的方法であり從つてその内容は自ら豫想さるゝものがある。卽三八三頁の本

文は能樂諸流篇、地方能樂篇の二部に分れて居るがこの論述するところは殆ど能樂諸派の傳承に關するものである。前篇に於ては先づ觀世四代の事蹟と相承の次第を述べ次いで「金春史考・喜多源流考・福王氏族考・觀世梅若兩家の確執に及び後篇は泉州堺と能樂・京觀世の由來・加賀藩の能樂・明治維新後の京阪能樂界を取扱つて居る。篤學なる著者は文獻の廣き涉獵によりこれらの諸問題に精到なる研究を加へ穩當なる結論を發見してゐる。殊に後篇の諸論及前篇第四第五等は從來多く取扱はれざりしものとして注目すべきものであらう。能樂がもつ文化史的意義或は諸派を分ちし社會的理由等これらの研究が當然含むべき背景部分の考察が不足なる憾みはあるが而もかゝる文獻的研究はそうしたものと離れてなほ獨立の意義をもつものでありこの點著者の勞を多とすると共に續篇たる能樂文獻篇、能樂伎藝篇の速かなる刊行を待つ次第である(菊版三八三頁、價二・八〇、東京春陽堂發行)〔肥後〕

●醍醐雜事記　中島俊司編

昨春醍醐天皇一千年御忌を修した醍醐寺は、數年前より此の爲に同寺史編纂を計劃開始してゐた。然し悠遠偉大なる同寺の修史は數年の年月にて及ぶべくもなかつた。

古來同寺には二つの寺誌が存してゐた。一は慶長のころ、義演准后の自ら編する醍醐寺新要錄であり、一は文治二年、三寶院に上人の職にあつた慶延が、編した醍醐雜事記である。前者は當時殘存せる史料に準據して作られたるも未だ未定稿であるが、そこに收錄せられた史料早くも煙滅せるもの〻多い今日、更にその書の編纂に根幹を與へたものこそは、後者なのである。慶長九年二月、塔頭釋迦院の經藏を開き聖敎二百餘篋を披見せる折、義演准后偶々發見せるものこそ後者、卽ち醍醐雜事記、又は慶延記と稱せらるゝ十五卷であつたのである。「既及四百餘歲于今相殘奇妙々々」とその卷第一に奥書として手書せる准后の慶びを、今本書を手にして想見する。

本書の刊行せらるゝ迄、研究者は醍醐寺新要錄の影寫本により所引の慶延記を求める不便を忍び、續群書類從第九百二十三、雜部七十三(第三十一輯下、雜部)によら